

子育て支援プログラム活動報告

子育て支援プログラムは、人間科学研究所と心理臨床カウンセリングルームが共催している臨床活動の一つである。このプログラムは、平成十三年に開始した地域の乳幼児と保護者を対象としたグループ活動に始まり、現在では学童期まで支援の対象を広げて展開している。当初より引き続き、カウンセリングルーム相談員と大学院生であるカウンセリングルーム研修生が活動にあたっているが、さらに前年からは研究補助員として修士生も加わり、研修生として培った経験や知識を生かして専門性の高い支援を提供している。本活動は、地域の親子のニーズが原動力となり、立ち上がりから今日まで十年間続けられている。節目にあたる今年、偶然にも兵庫県内の大学における地域子育て支援の連携を図る「ひょうご地域子育て支援大学間連絡協議会」が設立された。六月に開催された設立記念シンポジウムでは、「子育て支援をきっかけに地域と大学がつながろう」というテーマで各大学での子育て支援の実情が報告され、甲南大学人間科学研究所の子育て支援の実践と成果について紹介する機会を得た。その場で、本活動の独自性ととも「大学」で行う活動に共通の課題も示された。ここでは、現在実施してい

る「親子相談」、「うりぼうくらぶ」、「子育てサークルまつばつくり&プレイグループどんぐり」、「まつの木くらぶ」という四つの子育て支援活動についてそれぞれ報告する。

「親子相談」は、子育てにかんするどのような内容でも、親子が一緒に訪れることのできる個別相談の窓口である。相談日は毎月二回、第二・第四水曜日の午前中であるが、今年度は相談者の増加に伴い、臨時相談日を四回設けた。相談活動は、親子にそれぞれ担当者が一対一で関わりながら同室で行う。定員を一回につき三組としており、したがって複数の相互交流の場で相談をすすめている。相談後はスタッフ全体でカンファレンスを行い、内容に応じて他のグループ活動を紹介したり、心理臨床カウンセリングルームで検査を実施したりすることもある。

「親子相談」では、親との相談から子どもの育ちのようすや環境を把握し、実際に子どもとかかわりながら客観的アセスメントをし、養育者への助言や子どもへの支援を行っている。今年度は、新規の相談申し込みがコンスタントにあり、また継続して利用される親子もあった。問題が顕在化しているわけではないが気になる子どもや、漠然とした心配を抱えている親の相談が多くみられ、いわゆる相談機関には足を運びにくい、しかしながら潜在的な問題をはらむ親子の「踊り場」として機能しているようである。

「うりぼうくらぶ」は、親子のふれあい体験や、他の親子と

の交流の機会を提供することを目的とした親子の遊びの教室である。活動日は毎月第二・第四火曜日の午前中で、年間二十三回開催している。プログラムは、保育士による設定遊び六十分と、スタッフがかわる自由遊び三十分の二部構成になっており、それぞれ違った体験ができて親子には好評である。参加者の大半が継続参加されるため、幅広い遊びを提供できるよう、毎年恒例の季節行事にも変化を加えるよう心がけている。参加児の年齢層は〇歳から四歳と幅があり、それぞれの発達段階での楽しみ方を提供することにも配慮している。今年は、これまで最多であった平成十五年の参加者数を上回り、開設以来もつとも多くの親子に利用された。これまでの実績に基づくプログラム内容の充実や、スタッフの丁寧なかかわりによるところが大きいのもちろんであるが、「個が尊重される集団」という乳幼児親子のニードと、「うりぼうくらぶ」が提供する支援の質が一致していることも、希望者増加の一因であろう。親、子、スタッフの三者がそれぞれに関係し合いながら、全体で全体を支える雰囲気「うりぼうくらぶ」にはあり、昨今の「孤育て」社会にあって、「〇育て」の風土が感じられるグループである。「子育てサークルまつぼうとプレイグループどんぐり」は、親子がそれぞれ親グループ、子どもグループに分かれて過ごす活動で、全五回のプログラムを年間二クール実施している。一クールごとにメンバーを固定し、松尾恒子名誉教授による子

育て講話や、心理学的なグループワークを取り入れていることもあり、グループ間での体験を共有しやすい。今年は第十八期、第十九期の二クール開催した。十九期では初めての試みとして、椋田美佳先生のご指導のもとアート体験に取り組んだところ、子ども主体の日常において埋没する自己の表現を楽しむ親の静かなひとときとなり、「自分のために集中して何かをすること自体、貴重」、「久しぶりに一人で熱中するすてきな時間になった」という感想が多く寄せられた。自立した一人の成人として生きてこられた親にとって、小さな集団ではあるが社会のなかで「自分自身」としての時間を得ることの意義と、得がたさとを改めて感じる機会となった。同じく人間科学研究所と心理臨床カウンセリングルームで共催しているアートグループの知見を、子育て支援活動に展開できたことはまた、大学という資源を地域に還元するという視点においても大変意義深い。今後ともアートの要素を含む活動をプログラムに、取り入れていきたいと考えている。さて子どもグループ「プレイグループどんぐり」では、親と離れて過す子どもたちが会うたびに異なる姿を見せることに、スタッフは新鮮な驚きを感じながら、ともに成長していくようである。スタッフもまた、回を重ねるごとに子どもたちを見守る視点が定まり、子どもたちの世界に自然と寄り添い支えているようすがみられている。

学童期グループ「まつの木くらぶ」は、「子育てサークルま

つばつくり&プレイグループどんぐり」卒業生のフォローアップグループとして、三年前から定期的に活動している。このグループは小学生親子を対象にしており、夏休みと冬休みを利用して年に二期開催している。今年は参加者がやや減少したものの、思春期の子どもへの対応に苦慮される親の思いや、もどかしいエネルギーに翻弄される子どもたちの姿があり、日常の親子の葛藤が垣間見られた。幼少期に育てにくさを感じていた親子も少なくはなく、半年に一回ではあるが、自身の気持ちを振り返り共有する時間のもつ意味は大きいと感じている。

今年は、三月の大震災や原発事故、夏の台風という大きな災害に見舞われ、至るところ深い悲しみに覆われた。それと同時に、人と人とのつながりを実感することの多い一年でもあった。家族の大切さを感じた人の多さを象徴するように、平成二十三年を表す漢字には「絆」が選ばれた。人とのつながりは、時に支える網となったり縛る網になったりもする。子育て支援プログラムでは、人を支え関係を育む「絆」とはどのようなものであるのか、それぞれに特色のある活動を通して今後も考えていきたい。

末筆ながら、今も苦しみや不安の中で過されている皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

(池内 まり)